
たったひとつの願い

＊shin＊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たったヒトツの願い

【Nコード】

N5847Y

【作者名】

shin

【あらすじ】

神様なんていない。
願いは叶わない。

アノヒトニアイタイ

たったヒトツの願いさえ、叶わないのだから――

高校一年生の奏歌は、何でもできる完璧な人。

美人で、学年で三本の指に入るほどの秀才。

中学校では三年間陸上部のエースとして駆け抜けた。

誰にも好かれる明るい性格で、異性からの人気もバツグン♪

それでも、奏歌に彼氏はいない。

それは一体なぜなのか――

誰もが不思議に思っていた。

奏歌はずっと前から、会えることのない人を、一途に思い続けたのだ。

叶うことのない願いはふくれ、奏歌の運命が動き出す!!

プロローグ 〈ササヤカナネガイ〉

願いは強く願えばきつと叶う――

そんなの信じない。

良い行いをしていれば、いつか報われる――

そんなことはない。

神様は、良いことをしていれば願いを叶えてくれる――

そんなこともない。

神様なんて信じられない。

そもそも、神様なんていない。

神様も、妖怪も、ヒーローもない。

なにもかも信じない。

どんなに願ったって私の願いは叶わなかった。

神様に私の願いは届かなかった。

たったヒトツの、ささやかな願いさえ、叶えてはくれなかった。

アノヒトニアイタイ

たったそれだけの、たったヒトツのことなのに――

第一話 くユメノヨウナデアイく

——目の前に誰かが、いる。

……だれ？

視界はかすんでいて、よく見えない。髪の毛の長さや体格からして、男の人だろうと、かろうじてわかるくらいだ。

男の人が、こちらに向かって手を差しのべる——
なにかを感じた。

もしかして、この人は——

気が付くと私は、彼に向かって歩き始めていた。良く見ると、視界がはれてきている。

黒くて短いさわやかな髪。キリッとしていて、整った眉。シュツとした鼻筋、シャープな輪郭。そして——

彼が背を向け、私とは逆の方向へ歩き始めた。

「まって」

私は彼のあとを追いかけたいのだが、からだが重くて動かない。紐で縛られているかのようだ。

あの瞳——間違いない。やっと会えたんだ。

あの人に——

喜びに浸っているのも束の間。

彼の背中はどうも遠ざかって行く。ここで別れたら、次はいつ会

えるかわからない。でも、追いかけたい気持ちとは裏腹に、私の体はどんなに動こうとしてもびくともしない。

お願いだから行かないで。私を置いていかないで。

彼の背中に向かって願う。

『待ってえ!!!』

.....。

.....。

第一話 くユメノヨウナデアイく（後書き）

プロローグ、一話目と、見てくださってありがとうございます♪

よりよい作品にしていけるよう頑張りますので、コメントや評価よろしくお願いします（>ω<）

第二話　くワタシノネガイく

『待ってえ!!』

「……なにが、待ってなんだね? 夢見?」

「へ!?! いや……その……」

状況が全くわからない。辺りを見渡してみる。

幾つもの机と椅子がキレイに並んでいて、その一つ一つに人が座っている。そして奥には緑色の板に、白い文字が書いてある。

そう。教室だ。

「夢見?」

そして私の名前を呼んでいるのは、あの人……ではなく先生だ。どうやら社会の授業中らしい。夢だったのか……

「えっと……あっ! もうOKです」

「何がだ?」

頭のなかで必死に言い訳を考える。

「その……ノートとるのおいつけなくて、待ってもらったんですが、もうできたので大丈夫です。授業を続けてください」

先生は少し考えた後、授業を再開した。

なんとかごまかせたようだ。

少しして、私の視界の片隅に　トントン　と、机を叩く指が見えた。その指の先にいるのは、隣の席の生意気なくそガキへ魅輝　ミキへ　だった。

返事するのは面倒だったが、気づかない訳がないので、印象が悪くなると思い、しかたなく魅輝の方を向いた。

魅輝は、私のことを何とも言えない顔でのぞき混んでいた。悲しん

でるといとか、不安といとか……とにかく、いつもの陽気でうるさい感じではなかった。

まあ、うるさくない分には逆に嬉しいんだけど。

魅輝は、くしゃんと歪んだ顔で口を開いた。

「な、みだ……を、拭け」

「え!？」

何を言っているのか、良くわからない。ナミダ?もしかして……涙のこと?

「涙を拭けと言ってるんだ」

今度はちゃんと聞き取れた。少し照れ臭そうで、心配なんかしてないぞ と付け足されそうな言い方だった。

あわてて目に手を当てる。離れたその手には、雫が付いていた。

「私……泣いてる」

つぶやくように言う。泣くことなんて、とうの昔に忘れていた。それほどに涙することは久しぶりだったのだ。

制服のすそを引っ張り、目をゴシゴシとこする。その様子を見た魅輝が、もう一度話しかけてくる。

「びっくりした。その、何てゆーか……悲しんで、悩んで……。奏歌みたいな完璧な人でも、悩みとかってあるんだなって……さ」

「そりゃ、あるよ。人間だもん」

それっぽいことを言いつつ、私は悔やんでいた。

本当の感情は決して無くしてはいけない。でも、表に出してもいけない。少しでも長く生きるためには――そうあの人は言っていた。なのに、見せてしまった。涙を流してしまった。あの人に近づきたくて、あの人に認められなくて、生きてきたのに。

勉強は学年でも一桁に入るほどの秀才で、運動だってできる。顔もよくて、話だってできて、とても気がきく。感情豊かで、人気者。

悩みなんてない、完璧な人。みんなは私のことをそう思っているはず。

でも本当は……全部計算の上だった。感情をコントロールして、周りをあざむく。他人なんか信じない、頼れるのは自分だけ。でも、決して自分に嘘はつかない。

全てはあの人に出会えたときのために――

あの人に……会いたい――

「そりゃ、あるよ。人間だもん」

その言葉のあと、奏歌はすっかり黙り込んでしまった。さっき寝たときと似た表情だ。奏歌のこんな顔は、正直見たくない。他の男のことを考えて、苦しんでる顔だ。

なんで俺と話してるのに、他の男のこと――

すぐくムカついた。その男の方に対してだ。

奏歌が寝ていたときの言葉……思い人がいるとしか思えなかった。

その上奏歌の目は真っ赤で、そいつは奏歌のことを苦しめているのだとさとした。

奏歌は苦しめられている。なのになぜソイツのことをを思うのか、わからなかった。そんなに魅力的なのか。俺は苦しめたりなんかしない。ずっとそばにだっっていれる。なのになんでソイツなんだ。ソイツは誰なんだ。

一体それは……

「一体誰なんだ」

「一体誰なんだ」

「……何が？」

魅輝が唐突に口を開いた。私が返事をする、少し驚いて、顔を赤らめた。相変わらず訳のわからないやつだ。

「奏歌、お前は一体……誰を思っているんだ」

「!!!!」

心の内を見透かされたような気分だった。ネヴ……と言うわけにもいかず、言葉に詰まってしまう。すると、耳まで真っ赤になった魅輝が、あわてて言い直した。

「ごめん、忘れて！気にしないで！」

とてもあたふたしていて、少し笑ってしまった。

しかし、危なかった。向こうがさがってくれたから良かったものの、問い詰められたらなんと答えていいものか……。

「誰なんだ」

つぶやいてみる。正直、自分自身わかってはいないかもしれない。

私はあのひと、話すどころか出会ったことさえないのだから。しかも向こうは、私のことを知らない。それでも、私はあのひとのことが――。

？ネヴ？他ならぬあの人の呼び名だ。本名は知らない。

黒い爽やかな短髪に、シャープな顔筋。キリッとした眉に、スツと高い鼻。そして、とてもキレイな瞳。何色と表現したらいいのかわからない……とても澄んでいる。グレーに近く、少し青みのかかったような、美しく深みのある眼だ。その顔立ちはとても美しく、女性とも男性とも見てとれる不思議なもの。声は心まで響き、風のように流れる。

でも私は、その美しい容姿や声に焦がれているのではない。ネヴの中身、考え、生き様――見えない全てに惚れたのだ。

その美しい声と顔を巧みに変化させ、人々を魅了しあざむく。自分だけを信じ、人と繋がりをもとうとしない。他人を騙し、脅し、利用する。それでも決して嘘はつかない、筋の通った人。

そして、復習に生きる――

会いたい。とても、とても、焦がれる。会いたくて会いたくてしかたがない。

頭のどこかではわかってるんだ、会えるはずがないと。それでも、いつか会えると信じていたい。現実が怖くて、誰にも言えないこの思い。否定され、そんな人いないと言われるのが怖くて、隠し続けたこの思い。いつまでも膨らみ続けて、会いたいネガイはつのるばかり。

人の為に泣くな。怒るな。溜め息などつくな。生きたければ、他人に隙を見せるな。

全てネヴの言葉だ。閉じ込めていた思いは膨れ上がって、もう制御

出来なくなってきた。ネヴの言葉は、ネヴへの思いによって守れなかった。全てはネヴの影響。もう私にとってはなくてはならない存在だった。

押さえきれない想いを、今ここで告白します。

あの人の呼び名はネヴ。

小説の、かっこいい、かっこいい主人公。

いつか逢えると、信じてる――

第二話　くワタシノネガイく（後書き）

こんな素人の作品を見てくださり、ありがとうございます。

今回は、軽く状況説明といった感じで書か

せていただきました。いかがでしたでしょうか？

感想、レビュー、評価など、次話の参考にしたいと思いますので、
よろしく願います☆

次話からは、やっとストーリーらしいものになっていきます!!

会えない人に恋をしてしまった奏歌と、そんな奏歌を一途に思う魅
輝。その結末はいかに!!

これからも、どうぞよろしく♪

第三話　くミキノネガイく

その日から私は、毎日ネヴの夢を見た。

地面は見渡す限りの草原で、空は晴れ渡り、所々に真っ白な雲が浮かんでいる。息を吸い込むと、あたたかい、やさしい空気が入り込んできた。とても美しい地だ。そしてどこからともなく、彼は風と共にやって来て、私に一步いっぽ歩みよって来る。その美しい顔には、嘲笑に似た笑みがうかべられていた。彼は数多の笑みを使い分けている。風が流れた。優美なしぐさで手がさしのべられ、私がその手を受けとると、風に流されるかのような感覚で、現実世界に引き戻された。

そのとき私は、いつも、目に涙をうかべている。

その涙は、悲しみによるものなのか、喜びによるもののかは全くわからない。

夢の中で、ネヴの表情や動きはハッキリとわかるのに、顔立ちは霧のようなものがかかっているかのようだった。文章で見たものを画像にしているから、細かい部分はハッキリしなくて当然なのかもしれない。だが、そのことは、実際にネヴを見たことがなく、想像上であるから起こることなのだ。その上夢だったのだから、目が覚めたときの落胆はハンパじゃない。

しかし、何度もネヴに会う夢を見ていることで、？これから会う？というお告げ、正夢ではないとも思える。しかも、たとえ夢の中でさえネヴに会えると嬉しい。

夢を見る度に、想いはどんどん強くなり、ネヴについて考える時間

も増えていった。

初日は動揺を隠せず、すごい形相をしていた……と、周りの友人だ
と思い込んでいる人たちが言っていたが、今ではすっかり隠しとお
している。頭の中ではいつもネヴのことを考え、悩んでいるが、見
た目は満面の笑みでガールズトークをしていたり、数学の方程式を
解いていた。

ただ、一つ心配なことがある。

それは――

今日も私は学校に向かう。今朝もネヴの夢を見たが、もういい加減
慣れてきてしまった。

学校に着きクラスに入ると、なんだか私の机の近くに人が群がり、
騒がしい。正確に言うと、私の隣の机――魅輝の周りだ。いつもの
ことではあるが、あまり賑やかなのは好きではなかった。

「おはよう」

いつもと何一つ変わらない、爽やかな笑顔で挨拶をした。

「おはっ！」

「おはようーさん♪」

口々に挨拶が返ってくる。

「……おはよう」

このビミョーな返事をしたのは、私の心配事、魅輝だ。魅輝は人気

者で、クラスの中心的人物。魅輝の周りに人が集まるのもそのせいだ。つい三秒前までは元気にみんなとはしゃいでたはずなの、私と会った瞬間、妙におとなしくなる。魅輝とは、あの日からずっと、なんだか気まずい雰囲気なんだ。てゆうか、少し怒ってる感じがする。

脈アリだと思ってたんだけどな……

自慢じゃないが、私はよくモテる。魅輝の態度や行動は、私の経験上、？好き？のサインだったんが……違ったのだろうか。まあ別にいいけど。私が好かれたいの、はネヴだけだし、今まで告白されたことはたくさんあったけれど、他に好きな人がいると言って全て断っていた。好きな人とは、もちろんネヴのことである。

キーンコーンカーンコーン……

予鈴が鳴った。皆がガタガタと自席に移動し始め、私と魅輝が取り残される。きまづさを感じつつも、目をそらせない。無言のまま、見つめ合う。恋人どうしみたいだ。

ネヴと——こんな風にできたら幸せだな♪

こんなときでも、ふと考えてしまう。

すると、今まで立ち尽くしていた魅輝がいきなり、ふいっとそっぽを向いてしまった。そして、かなり大きな音をたてながら席についた。よくわからないが、やっぱり怒っているらしく、私への態度だけ、そっけない。

授業中もおとなしく、しかめっ面をしていて、全く話しかけてこない。

いつもはしつこいくらい話しかけてきたり、ニコニコヘラヘラしてるのに——

おかげで、周りからは、私が何かして怒らせた、と思われてしまった。魅輝がいくらおとなしくても全然かまわないのだが、変な噂をたてられては黙ってられない。

ああ、めんどくさい。

「魅輝さあ……ウチ、なんか気にさわるようなことしたかなあ……？」

こういうときは、少し目に涙を溜め、うるうるとした瞳で上目使い。これで口答えする男はいないね！

魅輝はこっちを見て、少し間をあけて、また背を向けてしまった。なにか呟いている。

「……ず、……いん……よ」

「何？聞こえな」

『ずるいんだよ!!』

あっけにとられた。何のことを言っているのかわからない。狂ってしまったのかとも思ってしまったまほどだ。しばらく沈黙が続き、消え入りそうなほど小さな声が聞こえてきた。

「……ごめん……こんなこと……言いたかった訳じゃ……」

感情の上下が激しすぎてついていけない。

「放課後……放課後、体育館裏に来て。待ってるから」

今度は、真っ直ぐで、固い決意の言葉だった。

最後の授業がおわり、そそくさと教室を出ていく魅輝。周りからの放課後のお誘いをていねいに断りながら、周りに群がる人の中を抜けるのは大変そうだ。その様子を見ながら私は考えていた。

魅輝はかなりの人気者で、休み時間にはいつも人が集まっている。元サッカー部で、運動神経が凄くいい。体育の授業中は、いつもかなりの女子ギャラリイがいた。頭も悪くないし、顔も悪くない。しかも、とてもユニークだ。よーするに、モテる。とにかくモテる。

そんな彼に呼び出された。今までは断ってきたが、そろそろ彼氏の一人くらい、いてもいい頃かと思う。しかし？好き？と口にすることは偽りになってしまうのでできない。何か工夫しないと……

まあとにかく、アイツ人気者だし、お似合いの二人ってことで、告白OKしちゃおうかな♪

そんな思いを胸に、私は体育館裏へと向かっていた。魅輝の思いも知らずに――

第四話　くヒメテイタオモイ

いつもと変わらない朝が来た。学校へ向かうと、すぐにどっと人が押し寄せてくる。

「おはよー」

「今日ははやいじゃん」

「めずらしー」

なにげない会話をして、くると教室を見渡す。たしかに今日はいつもより少し早いようで、まだ半分くらいしか来ていなかった。

奏歌もまだ来ていない。

寂しいような、ちょっとホッとするような、変な気分だ。前までは、奏歌に会って話をするのが楽しくて嬉しくてしかたがなかった。たくさん早く会いたい、もっと話したいと、いつも思っていた。大好きなんだ。

それが、最近は無カついてしまう。奏歌への気持ちが薄れた訳ではない。むしろ強まったからこそ思うのだ。あの泣き顔。今までは、別にほかの人のことを考えていても、気に留めていなかった。でも、あんなに苦しんでいる奏歌を見て、じっとしていられる訳がない。ライブル心が燃える。

「おはよう」

奏歌が来た。片手を軽くあげ、みんなに手を振りながら、爽やかに入ってくる。あいさつをするたびに相手の瞳を見て、にっこりと微笑む。なんと優美なことだろう。思わずうっとりしてしまう。なにげない動きなのに、なめらかで美しい。そしてふりまく笑顔のカワ

イイこと！キュートな顔つきで、やさしく微笑む姿は、まるで天使のようだ。多分俺が奏歌のことが好きじゃなくても、そう感じることであろう。

「おはよう」

ぼーっと見とれていた俺に、他と変わらぬ笑顔が向いた。はっとして、答えようとしたが、言葉につまる。強烈にカワイイ笑顔を見て、頭の中がオーバーヒートしてしまった。

少しおちやらけた雰囲気がいいのだろうか……それとも、爽やかに返した方がいいのか……

「……おはよう」

やってしもーた……

いくら焦っているとしても、この態度はひどすぎた。怒っているように映ったかもしれない。どうしてこんなに動揺してしまうのだろうか。前までは平気だったのに。あの日から俺の中で、なにかが変わってしまった。あの泣き顔から。

なんでもできる奏歌、可愛くて綺麗な奏歌。そんな奏歌の本当の姿を、あの日に初めて知った。俺は今までも見えていなかった。側にいたいと思っていても、見ようとしていなかった。奏歌だって人なんだ。完璧じゃない。

人は、弱い。だから助け合って生きて行くんだ。奏歌の泣き顔を見て、初めて思った。

俺は奏歌の笑顔を守りたい。奏歌の側で、守りたいんだ。

ふと気がつく、俺と奏歌以外のクラスメイトは席についていた。いつの間にか予鈴が鳴っていたようだ。立っているのは二人だけ。しかも、今までずっと見つめ合っていた。目をそらさずにいてくれることに、喜びが沸き上がったが、さすがに少し照れる。奏歌も顔を赤らめているように見えた。

——違うな。

奏歌も照れている……そう思って、すぐに違うと感じた。顔は赤らんでいる。けれど、その大きなパッチリ二重の瞳が見つめているのは、俺だけじゃなく、視線は俺の目に届いているが、瞳はどこか翳り、遠くを見つめているように見えた。

——また、誰かのことを……

頭に血がのぼる。俺は奏歌から目をそらし、席に着いた。すごく不愉快だ。いつでも奏歌の頭の中には俺じゃない誰かがいる。奏歌を苦しめる誰かが。

この不快感は、ホームルームでも、授業中でも続いていた。

国語の授業中。先生が甘くて、全然怖くないので、周りがすごく騒がしい。俺のイライラが倍增する。いつもなら、ここで奏歌とどびきりの笑顔で話しているところだが、今はそんな気分ではない。それなのにも関わらず、奏歌から話しかけてきた。

「魅輝さあ……ウチ、なんか気にさわるようなことしたか　なあ……」

ぎょっとして振り返ると、目に涙を溜めた奏歌がいた。そんな表情も、めっちゃめっちゃ綺麗だ。普通ならこんな顔を見てしまえば、？何でもないよ？と、満面の笑みで答えてしまうのだが、今の俺は不機嫌だ。

逆にイライラする。俺は奏歌のことを氣遣っているのに。いつも他のヤツのことばかり考えて。怒るのも当然だ。なのにあんな顔されたら……許したくなってしまうじゃないか。まったく奏歌はズルい。

高ぶる感情が押さえきれない。

「……ず、……いん……よ」

「何？聞こえな」

『ずるいんだよ！』

奏歌の言葉を遮るようにして、怒鳴り付ける。ポカンと口を開けて、呆然としている奏歌を見て、我に返った。さっきの泣き出しそうな顔が頭に浮かぶ。

——泣かせてしまったら、奏歌を苦しめる誰かと同じじゃないか。

奏歌を思うあまり、奏歌を苦しめていたら意味がない。そう気がついた。

——この気持ちに、踏ん切りをつけなきゃ……

奏歌には、いつも笑っていてほしい。奏歌の笑顔を守りたい。でもそうするには、思いが強すぎて、逆に苦しめてしまう。だから、ダメだとわかっていても伝えるんだ。そうすることで、変わるはず。好きという気持ちは変わらない。それでも、俺がこんなことをしていても、奏歌は笑顔になれないのだ。

「……ごめん……こんなこと……言いたかった訳じゃ……」

素直な気持ちを伝えよう。奏歌の笑顔のために。

「放課後……放課後、体育館裏に来て。待ってるから」

放課後になった。

決意した俺は、確かな足取りで教室を出た。

第四話　くヒメテイタオモイ　（後書き）

の印で囲われてるところは、魅輝サイドのストーリーです♪

今回も読んでくださり、ありがとうございました！！

一週間に一度くらい更新できるよう頑張ります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5847y/>

たったヒトツの願い

2011年12月17日19時52分発行